

大里地区に「王国」を築き上げた鈴木商店

鈴木商店の成長発展と大里

「幻の総合商社」と呼ばれる鈴木商店は、辰巳屋からのれん分けして港町神戸で明治7(1874)年に開業した、洋糖業を発祥とする会社です。創業者の鈴木岩次郎は神戸八大貿易商と称されるまで会社を成長させましたが、志半ばで急死。未亡人となった鈴木よねがその後を引き継ぐと、経営の一切を金子直吉と柳田富士松の両番頭に託し、会社を大きく発展させました。金子直吉は持ち前の才覚を発揮して、台湾総督民政長官である後藤新平と交誼を結ぶと台湾から樟脳油の販売権を獲得し、事業を拡大していきました。



大正2年4月に竣工した帝国麦酒(株)工場

明治中期の日本では、日清・日露の両戦争を挟み軽工業から重化学工業中心の産業発展へとシフトしていきました。鈴木商店もまた同様に、製糖、樟脳、薄荷からセルロイド、鉄鋼、造船、人絹と重化学工業へ多角化していき、製造業を次々と立ち上げました。番頭である金子直吉は“煙突男”とも呼ばれ、渋沢栄一や福沢桃介など当時の経済人に天才と評されました。

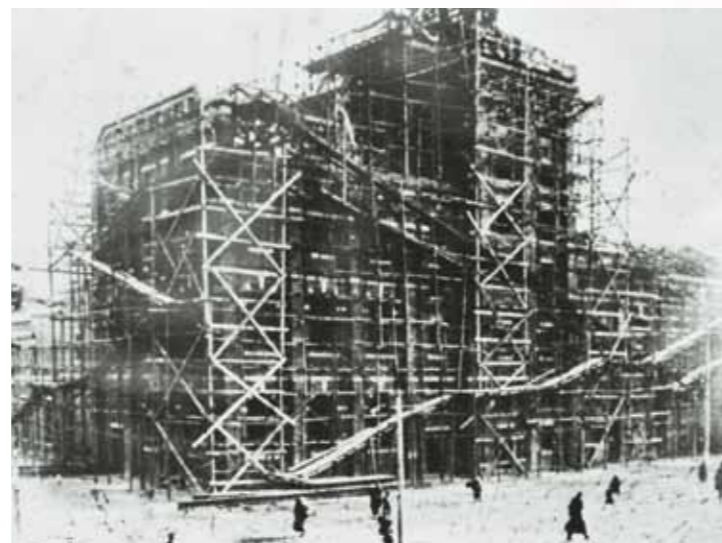
この鈴木商店が飛躍するきっかけになったのが、北九州・大里での製糖所設立です。当初、台湾基隆での工場建設から、官営製鐵所最終候補地のひとつであった大里に計画を変更し、明治37年(1904)年大里精糖所(現・関門製糖)を設立。大里を流れる大川の水質、豊富な石炭と

労賃、原料であるジャワ糖の輸入コストの面で他社を圧倒。金子は販売権を残したままライバル社に製糖所を譲渡し巨額の利益を上げ、これが鈴木商店の多角化展開の原資となりました。

「鈴木王国」絶頂期と企業進出

鈴木商店のピークは、第一次世界大戦と前後します。金子は戦争の長期化を予期し、鉄の買い占めを指示、その後価格が暴騰し大躍進します。ロンドン支店長で後に日商岩井の社長となる高畑誠一は、「大英帝国といえども鈴木にとっては一介の客に過ぎぬ」と強気のビジネスを展開した結果、大正6(1917)年、鈴木商店はGNPの1割相当の売上を計上し、日本一の総合商社となりました。

この頃の鈴木王国の成長は大里地区での企業立地と同期します。明治44(1911)年に大里製粉所(現・日本製粉)、明治45(1912)年に帝国麦酒(現・サッポロビール)、大正3(1914)年に大里酒精製造所(現・ニッカウヰスキー)、大正6(1917)年に神戸製鋼所(現・神鋼メタルプロダクツ)、大正9(1920)年に日本冶金(現・東邦金属)、その他大里製塩所、大里精米所等を設立し、大里の臨海部にコンビナートを形成していきます。また、鈴木商店の事業は、対岸の下関にも及び、大正5(1916)年の福岡日日新聞では関門海峡は鈴木王国として紹介されました。



建設中の帝国麦酒工場(明治45年頃)



大日本製糖(株)大里工場全景(大正8年)

鈴木王国の系譜を継ぐ企業群と大里の近代化産業遺産

一方、急成長を遂げた鈴木商店はライバルから妬みを買って、米騒動の際に本店を焼き打ちされる悲劇に見舞われます。想定より早く第一次大戦が終了すると、反動不況の結果、急拡大策が裏目となりました。借金体質となった鈴木商店は大正12(1923)年の関東大震災で被災し、昭和2(1927)年の金融恐慌のおりを受けると、ついに破綻してしまいます。破綻後高畑誠一を中心に日商(後の日商岩井、現双日)が設立。金子直吉自身も鈴木商店の復興を目指し太陽産業にて再起をかけるも、戦時中に死去しました。神戸製鋼所、帝人などの企業はそれぞれ自主再建を遂げ、また他の資本に移った日本製粉、J-オイルミルズ、ダイセル、昭和シェル石油、サッポロビールなどは今も活躍しており、鈴木商店の足跡はなお日本の産業史で輝き続けています。

門司区大里には、大里精糖所が現在も関門製糖の工場として現役で稼働し、帝国麦酒の工場はサッポロビール九州工場



を経て、門司赤煉瓦ブレイスとして保存されるなど、鈴木商店当時の煉瓦造の建造物が今も多く残ります。



鈴木商店についての詳しい資料は、鈴木商店記念館ホームページをご参照ください。
<http://www.suzukishoten-museum.com/>

戸上神社と鈴木商店

戸上神社の境内には、鈴木商店関連企業と縁の深い「前田組」前田金次郎氏、「池田組」池田源次氏や帝国麦酒が寄進した石碑が残されています。鈴木商店の進出が地元にも影響を与えたことがわかります。



サクラビール

社會衣類酒麥製糖